

## 〈文学〉と〈名作〉のあいだ

——一九五〇年代河出書房刊行の少年少女向近代文学叢書を中心に——

佐藤 宗子

千葉大学・教育学部

Education or Entertainment:  
Three Modern Literature Series for Young Readers Published by Kawade-Shobo in 1950s

SATO Motoko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

「現代児童文学」出版前夜の一九五〇年代に、河出書房は複数の「近代文学」ないし「児童文学」に関する叢書を刊行した。それら「日本児童文学全集」「日本少年少女名作全集」「日本少年少女文学全集」(未完)を検証した結果、少年少女向けの近代以降の「文学」は、「童話」を中心とする「児童文学」と、やや年長を意識した「小説」などの散文作品を中心として考えられており、散文の種類としては、写生や自伝的作品、感想といった文種も想定され、さらに詩や劇も一定の位置を占めていること、「名作」には長編読み物が該当するが、戦前からの日常を描いた少年読物、少女読物のほか、伝奇物・時代物、探偵物なども相当し、さらに戦後の日常を描く新作も含まれていた。他方、今日の「ファンタジー」にあたる作品はほぼ皆無といえる。さらに、この時期においては「近代文学」という語は、意味を十分に確立させていない。この後、こうした叢書に見られる多様な「文学」の幅は、むしろ狭められ、散文の「小説」中心に移行していったのではないか。他社の叢書を対象に、検討を続けていきたい。

キーワード：児童文学 (Children's literature) 近代文学 (Modern literature) 叢書 (series) カノン形成 (literary canon) 体系化 (systematization)

— あること、さらにその後の「近代文学史」と「児童文学史」の確立の経緯を検証する際の起点たりうることなどを指摘した。

第二次世界大戦後の一九五〇年代、少年少女向け叢書における日本文学の体系化については、先に「児童文学叢書における「日本文学」——伝承・古典・近代文学の体系化——」(『千葉大学教育学部研究紀要』第六四巻、二〇一六年三月一日)の中で、創元社「世界少年少女文学全集」と講談社「少年少女世界文学全集」の両叢書における収録状況を取り上げ、概観した。ここではとくに、古典文学と異なり「近代文学」をまとまりをもって提示すること自体が新たな「媒介者」の仕事であったこと、「近代文学」と「児童文学」が接点を有しながらも分かれていく過程

にあること、さらにその後の「近代文学史」と「児童文学史」の確立の経緯を検証する際の起点たりうることなどを指摘した。この二つの叢書刊行のあいだの時期に、複数の「近代文学」ないし「児童文学」に関する叢書を、次々に企画・刊行したのが、河出書房である。同社は当時、日本文学や翻訳文学について、一般向けの叢書や新書等の形態で続々と刊行をしていた。そして一九五三年から五七年にかけて、児童文学を含む近代文学に関する少年少女向け叢書を三種、刊行する(そのうち一種は、同社の経営破綻によるとみられるが、刊行が途中で未完となる)。

それらの叢書において、近代以降の文学作品は、どのように集大成されていたの

か。どのような名称が叢書やその中の区分に使用されたのか、「児童文学」と「近代文学」の体系化は具体的にどのように構想されたのか、といった問題意識のもとに、三つの叢書の内実を具体的に検証し、「文学」や「名作」といった語がその時期にどのような意味・意義を持ち得ていたのか、関連する同時期同社刊行の他の叢書や雑誌も視野に入れつつ、考察を進めることにしたい。なお、本論の末尾に三種の叢書の簡単な一覧を、検討順に掲げた。

## 二

## (1)

今回検討する三種のうち、最初に刊行されたのは、「日本児童文学全集」である。一九五三年三月に第一回配本開始となり、ほぼ月一回のペースで刊行され、翌年一月に全十二巻が完結した。

末尾の一覧の「内容」欄について、簡単に説明をしておこう。童話篇および詩・童謡篇では、作家・詩人ごとに「○○○○集」として名前が掲げられ、作品がまとめられている。童話篇については、すべての作家の作品掲載の前に「作者の略歴」が、さらに存命の作家の場合にはその前に「作者の言葉」も置かれている。また、その後に記した算用数字は、収録作品数を表している。島崎藤村のみ「1(全)」としたのは、「おさなものがたり」がすべて収録されているため、このような表記とした。

まず、全体構成が目を惹く。童話篇八巻、詩・童謡篇一巻、児童劇篇一巻、少年少女小説篇二巻という配分は、大正期以来の芸術的童話童謡雑誌の掲載作品ジャンルを中心として立てられたもの、と考えられるだろう。

造本は、基本的に一段組みの本文など、小学校中級から上級を中心読者と想定したものであるが、それでいて、各巻いずれも、「解説」に相当のページを割いている。というのも、各巻の総ページは、一番薄い第一巻で三二二ページ、一番厚い第十巻で三八八ページだが、それに対し解説のページ数は、一〇ページ分、一八ページ分となっている。

解説者名をみると、小川未明を除く編集委員はいずれも一つの巻を担当しており、その他は関英雄、高山毅、滑川道夫、山室静が執筆している。このことは、編集委

員が実質的な編集作業に関与していたこと、その他の執筆者たちも何らかのあたりに参画していたことをうかがわせる。この陣容から推察するに、小川未明・浜田広介・坪田讓治の大家三人を擁しつつ、当時の批評的な眼を持つ児童文学関係者たちが、相当に意見を交わしつつ「児童文学」の集大成をしたとみなしてよからう。

次に、巻ごとの作家の配置も興味深い。基本的には、児童文学の出版を明治期に活動を開始した巖谷小波に置きつつも、実質は大正七年創刊の『赤い鳥』時代以降に置いてある。今ではあまり言及されることのない島崎藤村、秋田雨雀の二人が、相対的に大きな存在として扱われているのに気付く。それに対し、新美南吉はまだまだ、小さな扱いに甘んじている。詩・童謡ではやはり、北原白秋・西條八十が両頭をなす。児童劇は童話劇と学校劇に二区分されているが、坪内逍遙、小山内薫といった近代劇でよく知られる名も見られるほか、前者が十二人、後者が十一人の作者を取り上げるなど、かなり広範囲に作品収集をした様子が窺える。

少年少女小説篇の二巻については、少し丁寧に見る必要があるだろう。ここでは滑川道夫、山室静の「解説」から適宜引用しつつ、編集意図を確認していきたい(以下、引用はそれぞれの「解説」による)。

この二巻の構想は、他の巻と同様に中級以上の年齢層向けの第十一巻、少し年長向けの第十二巻に大きく分けられる。

第十一巻は、滑川によれば、「童話と少年少女文学の橋わたしになるような時期に適した作品を主に収めて」おり、「1 これまでの少年少女小説」と「2 これからの少年少女小説」の「二つのすがたが織りまじったものを構想した、という。このうち、前者としては佐藤紅緑と吉屋信子の作品を予定したが、佐藤紅緑については未亡人の意思により収録できなかったという。つまりは、後者にあたる作品が、収録されたほとんどといっているわけだ、その分、「いまの日本の少年少女文学のいつわりのないありさま」だとも言うのである。確かに収録された作品の作家名をみても、『赤い鳥』時代の作家に始まり、現在ではまず知られていないような作家に至るまでまちまちであり、どちらかといえば、いわば体系を模索中の編集であるといつてよい。こうした編集作業の困難を思うと、この巻が最終配本であることも頷ける。

他方、第十二巻は、第五回配本となっていることからわかるように、比較的早い段階でまとめられたものである。したがって、山室の「解説」は、滑川の「解説」

よりもずっと早くに執筆されていることを念頭に置かねばならない。第十一巻と同様に二段組みで、その分、収録量も多い。それは、全部で八冊ある「童話篇」に比して、「小学校上級から中学へかけての、やや成長した少女諸君を讀者として予想している」ためである。つまり、「童話篇」↓第十一巻↓第十二巻と、讀者層の年齢を次第に上げた想定にしている、と山室は言うのである。もともと、八冊の「童話篇」に収録された「童話」作品群が、果たして年少の讀者向けと言い得るかどうかは、別に検討すべきことであろう。

さて本巻では、「より広い文学の世界に読書の範囲を手さぐりしているような諸君」を讀者として予想するからこそ、「できるだけいろいろな作者の、いろいろな傾向を異にした作品を集めてみよう」としたというのだが、その結果、「二十人の作家の書いた、三十五篇の作品」が収録された。山室はそれらを、以下のように五分類している（以下、区分の大見出しを掲げ、その後の具体的な作家・作品名は省略して、合計の数字のみを記した）。

- (一) 童話風の作。…… 七人、十二作品
- (二) 少年小説、少女小説。…… 五人、九作品
- (三) 小品文、隨筆の類。…… 四人、六作品
- (四) 小品文の中に入れられるけれど、科学的な觀察が主になっていて、動物文学と言すべきもの。…… 二人、二作品
- (五) 少年少女に親しめる純文学の作。…… 五人、六作品

なお、末尾の一覧にあるのは掲載順であり、右記の区分の順とは関係がない。また、同じ作家でも、川端康成の作品が(二)として「ばらの家」、(五)として「夏の靴」「ゆくひと」が数えられているように、一様な作品傾向で収録されているというわけではない。吉江喬松、寺田寅彦といった、普通、この手の小説区分に入れられることの少ない作家も、右記の複数区分に該当する収録作家となっている。

そもそも、(三)や(四)の区分の存在そのものが、通例で考えられる「少年少女小説」の範疇を越えているといつてよい。山室自身もそれは十分に承知しており、実際の讀者が読んだときに「いわゆる少年小説少女小説のたぐいが、思いのほか少ないことに驚く」ことを予想している。しかし、山室としては、「程度のひどい」作物や「センチメンタルな」お話などは、到底薦められるべきものではない、と考えている。そこで、「もっと広く一般の文学の立場から、すぐれた作家や詩人（中略）の

書いたもののうち、少年少女諸君にぜひ読んでもらいたいと思う作」を、今後の読書生活を念頭に置きつつ選んだ、というわけである。

滑川、山室の「解説」に即してみるなら、一九五三年という刊行開始のこの時期が、いわゆる「現代児童文学」の出発前夜の時期であることを改めて痛感させられる。奇しくも第十二巻刊行の六月は、早大童話会によるあの「少年文学宣言」の文章が執筆された時期と重なる。従来の読物的ではない、「小説」のありかたが、模索されていたのは、胎動期にある「現代児童文学」を担うことになるような若手の児童文学関係者たちの間のみでなく、こうしたアンソロジーの編集現場でも、同様であった。

このように、従来にない「少年少女小説」の解釈を施しつつ、ここではそれらも、「児童文学」——「文学」的なるもの、の中に入れ込まれた。内容としては歴史的にも高い評価を与えられつつ、営業的には時期尚早であった創元社の「世界少年少女文学全集」と同じく、一九五三年の刊行開始ということを考えるなら、困入りで一冊四五〇円のこの叢書は、当時の想定讀者層にとって、簡単に揃えられるものではなかっただろう。編者の願ひを受け止め得た現実の讀者は、実際のところ、どの程度存在したのだろうか。

(2)

「日本児童文学全集」全十二巻の完結から半年ほど経った、一九五四年八月から、「日本少年少女名作全集」の刊行が始まった。

この叢書は、末尾の一覧からわかるように、監修者として著名な作家四名を戴くものの、各巻に「解説」は付されていない。代わりに、著者による「まえがき」がある。それぞれの題名からも察せられるように、作者の作品に寄せる思い、讀者に対する願ひが、かなり直接的に、作品を読み始める以前の讀者に対して示される。各巻には、普通は一冊の単行本で刊行されるような作品が、二段組みで三〜四編も収録されるなど、かなり読みみのある作品収録状況といつてよいだろう。困入りで一冊二八〇円であるが、これは先の「日本児童文学全集」に比べれば、かなりお得な価格である。事実、巻末の広告の文言には、「一巻で三冊分読める」「安くて面白い名篇ぞろい」とある。すなわち、この叢書は、いわば読み物的な長編主体の叢書なのである。

末尾の一覧では、表の右側に、大まかに内容を区分してみた。少女向けの日常的な作品、少年向けの日常的な作品、そして時代・伝奇物や、探偵物、そうして詩集——少年向けと少女向け——といった構成である。あえて詩集というのは、どちらも相当量、収録されており、決して数ページを埋めると云った体ではないためである。ところで、この叢書は、一体、どのように読書されることが想定されているのだろうか。このことに関して、興味深い文章がある——叢書が完結してほどこない時期に河出書房から刊行された、『小学生上級版』『小学生中級版』という月刊誌に掲載された広告の文言である。

まず、この二つの雑誌であるが、これはいずれも一九五六年一月創刊の月刊誌である。ただし、次の二月号までは、大阪府立中央図書館国際児童文学館で確認することができたが、その後については現段階では未詳である。各二冊を見た範囲では、『上級版』には青木茂、檀一雄、芹沢光治良などの作品、『中級版』には与田準一、湯浅芳子、那須辰造、飯沢匡などの作品や手塚治虫のマンガが掲載されており、雑誌を手にした雰囲気としては、戦後間もない時期の代表的な良心的雑誌である『赤とんぼ』を、時代に合わせて進化させたような感じが漂う。編集後記をみると、『上級版』『中級版』どちらも、河出書房内では「児童文芸部」が編集を担当していることがわかる。

さて、この雑誌には、「日本児童文学全集」、「日本少年少女名作全集」いずれの広告も掲載されている。両者の広告を、左記に示す。

明治・大正・昭和にわたる日本児童文学の作品を体系づけたこの全集は『サンケイ児童出版文化賞』を受賞しました。という、非常にむづかしく聞えますが、むづかしいどころか、まじめに勉強したい人には必ず参考になり、また面白くよい作品ばかりが収められています。児童劇や学校劇のよい脚本もたくさんはいっています。(『日本児童文学全集』)

勉強をしたあとで読みましょう。勇ましいお話やかなしい小説、出てくる少年少女はみんなみなさんの手本になるようなりっぱな人たちばかり。勉強でつかれた頭なんぞいっぺんに直ってしまいます。頭のリクリエーションです。(『日本少年少女名作全集』)

「勉強したい人」が読む「文学全集」、「勉強をしたあとで」読む「名作全集」。ここでは、同じように少年少女を対象とする作品が、明確に二種類に区分されている。ちなみに、『上級版』創刊号の表三には、全五〇巻がそろった創元社——この時点では東京創元社——の「世界少年少女文学全集」の広告が、掲載されている。その中には、右の「文学全集」に共通する文言が見られる。すなわち、「この全集は——みなさんの勉強をお手伝いし、力になってくれるでしょう。」というのである。

創元社の「世界少年少女文学全集」と、河出書房の「日本児童文学全集」は、相通ずる。それに対し、同じ河出書房ながら「日本少年少女名作全集」は、「名作」という語から一般には想定されるであろうような〈マスターピース〉さらには〈クラシックス〉——本来の意味の「古典」——に通じるようなものとは、大いに異なる。それはちょうど、一九五〇年刊行開始の、あの講談社「世界名作全集」における「名作」が含意するものと、むしろ通ずると言えよう。つまり、「読み物作品」として「名高い」もの、なのである。

広告の文言が示唆するのは、もう一点ある。それは、その二種類の作品群で、読者層を分けているわけではない、ということである。つまり、芸術的な作品を読む高尚な少年少女と、通俗的な作品を読む大衆の少年少女が存在するのではない。すべての少年少女に、勉強となりうる「文学」と、娯楽となる「名作」の両方を提供する——、それが、この二種の叢書の意図であると、読み取ることができる。

### (3)

一九五七年一月、河出書房からは新たな叢書が刊行開始となった。「日本少年少女文学全集」である。監修者の五人(小川未明・川端康成・阪本一郎・坪田譲治・吉田甲子太郎)、編集委員の五人(荒正人・菅忠道・瀬沼茂樹・高山毅・山室静)ともに、著名な大家や気鋭の評論家などを揃えた錚々たる陣容であり、まさに日本の「近代文学」を対象とした全二一巻の集大成となるはずであった。しかし、確認できたところでは、刊行されたのは三月一日発行の第三回配本までで、本叢書は未完に終わったと考えられる。理由は、版元の経営破綻である。やがてほどなくして河出書房新社が同年五月二日に設立(現在の河出書房新社ホームページ記載による)となり、会社は再建されたが、この叢書が継続されることはなかった。

各巻の巻末には広告がなく、また各巻付録の月報には次回配本の予告が掲載されるのみで、他の叢書に比べて全容を掴みにくい。ただ、幸い、国際児童文学館に所蔵されている現物の一部の巻で、函に巻かれた帯が保存されていた。そこから、全巻の構成を把握することができた。末尾の一覧に、それを掲載してある。

収録予定の作家名のみからであるが、いくつか特徴を挙げてみたい。これまでの二叢書に比して、女性作家の名前が少し多くみられる。また、作家中心に巻構成されてはいるものの、構想された全二一巻中、約四分の一にあたる五巻が、ジャンルによる編成となっているのにも目に付く。それらのうち、詩、劇、短篇は、先に検討した「日本児童文学全集」にもあるように、別だてになることもよくあることである。だが、「小品」「生い立ちの記」といった文学ジャンルの区分と、「少年少女作品集」が入る予定というのは、かなり異色といつてよいだろう。

そうした全体の構想を見たうえで、実際に刊行された三冊、および第三回配本の月報掲載の予告から窺える第四回配本予定の、計四冊の内容構成に目を向けると、ここでも従来の叢書類とは異なる区分がみられることに気付く。第一回配本Ⅱ第九巻は、いわゆる児童文学作家たちの巻であるが、小川未明や坪田譲治については、「小説」と「童話」の両方を、同じ巻に収録している。第二回配本Ⅱ第十一巻では、「次郎物語」について、主人公の幼少年期が描かれた第二部までをすべて収録するのみならず、それ以降の青年期にわたる第三部から第五部までの「あらすじ」をも、収録している。そして第三回配本Ⅱ第三巻では、島崎藤村の一般文学の写生文、童話、詩、小説、紀行文、感想と、「小説」とは少し異なる種類の「近代文学」の作品を、さまざまに取り合わせて収録している。また、第四回配本として予定されていた山本有三の場合も、予告で見る限り、小説、戯曲、シナリオ、感想とジャンルの区分が明示されている。

ここから読み取れる「文学」の概念は、明瞭である。すなわち、「文学」というとき、それは「小説」だけを指すのではない。少年少女向けの「文学」叢書だからといって、「散文」作品である「小説」ジャンルと「童話」ジャンルをドッキングさせた構成にすればよい、というものではない。文体が明らかに異なる「詩」や「劇」以外にも、「散文」のなかにはさまざまな形態がある。……それが、この時期においては、そしてこの叢書においては、はっきりと意識されていたことが明らかである。

未完に終わったため、この叢書に表されるはずであった「文学」意識の全体像をつかむことはかなわない。しかし、今後、収録予定であった作家たちの作品群を視野に入れていくなら、そこに展開するはずであった「近代文学」の様相の多様さの一端を、窺い知ることはできるのではないだろうか。

### 三

一九五〇年代半ばを中心にした河出書房刊行の少年少女向け叢書を考えるとき、これら三種類の函入り叢書に対し、もう一種の異なるタイプの叢書を、いわば補助線を引くように、配置してみるができるだろう。それは、「日本少年少女名作全集」全二十巻が完結してから三か月後に刊行開始となった、「ロビン・ブックス」という廉価版の叢書である。一九五五年七月から翌年十一月にかけて、全二十七巻が刊行された。ソフトカバーで新書サイズをやや大きくしたくらい、一六〇ページ前後が多いが巻により厚薄があり、値段も五〇円から九〇円と幅がある。

内容も、多岐にわたる。宮沢賢治や小川未明、坪田譲治などの童話作家の作品、富田常雄『少年姿三四郎』や柴田錬三郎『少年三国志』などの少年向け読み物、船山馨や北条誠、芹沢光治良などの少女向け作品のほか、翻訳作品も全体の半分弱に収録されている——川端康成の『小公子』『小公女』、新庄嘉章の『三銃士』『ああ無情』、大佛次郎の『覆面の騎士』『アイバンホー物語』『狼少年』、そして大久保康雄『ターザンの生い立ち』『ターザン物語』など——。

興味深いのは、下村湖人『眼ざめ行く子ら』や吉田甲子太郎『源太の冒険』、あるいは壺井栄『十五夜の月』、中河与一『高原の少女』、大庭さち子『みどりの朝風』など、戦後の日常生活を舞台にして、少年や少女の主人公たちが生きぬいていく姿を描いた作品が、比較的多く目立つことだろう。また、このような外国古典から戦前の童話作品、そして戦後の新作に至るまでの多様な作品群が、最少一六ページから最大二三〇ページと、分量もまちまちながら一つの叢書として世に送り出されていること自体、先に見たような重厚な函入り叢書を刊行している河出書房の刊行物としては、少し不思議な感じもする。

その謎を解く手がかりの一つは、すべての巻の裏カバー見返しに掲載された、推薦の辞にあるといえよう。一人の推薦者の言葉が、複数の巻に掲載されているので、

推薦者は全部で八名である。以下に、氏名と肩書、推薦の言葉の題名を列挙しておく。(数字は、掲載された巻数を示す。)

小野重内(全国小学校長会会長)

「子どもたちに良い本を安く」……1、5、27

阪本一郎(全国学校図書館協議会会長)

「いつまでも親しまれる本」……2、13、21、23

清水慶子(日本子どもを守る会常任理事)

「母親の望む本」……3、8、11、19

辰野隆(芸術院会員/東京大学名誉教授)

「少年の夢を満たす本」……4、15

廿日出逸暁(全国学校図書館協議会理事/公共図書館部会長/千葉県立中央図書館長)

「よい子によい本よい日本」……6、7

滑川道夫(成蹊学園小学部主事)

「俗悪読みものにかわる本」……9、10、18、22

武者小路実篤(作家)

「まちがえない本と思う」……12、14

佐藤観次郎(衆議院文教常任委員長)

「少年少女によき夢を」……16、17、20、24、25、26

前述の雑誌、『小学生上級版』等に掲載された、「ロビン・ブックス」の広告では、右記のうち滑川の文章が流用されている。それが、端的に叢書刊行の目的を示しているからだろう。そこに言う「俗悪読みもの」とは、具体的にはマンガを指す。「ロビン・ブックス」が刊行開始となった一九五五年に、PTAなどを中心に悪書追放運動としてマンガを排斥する動きがあり、それはさらに、政治家を動かすまでに至っていた。そうした状況の中では、単にマンガを排斥するだけでなく、廉価で手軽に子どもたちが手に取ることができる文字媒体の叢書こそが、とくに媒介者たる大人によって、求められていたわけである。推薦の言葉の中では、「文学」でもなく「名作」でもなく、「本」として求めるものが意識されているのは、こうした事情によると考えられる。

冒頭の問いに戻ろう。近代以降の文学作品は、この時期、これらの叢書において、

どのように集大成されていたのか。また、どのような名称が叢書やその中の区分に使用されたのか、「文学」や「名作」といった語は、その時期にどのような意味・意義を持ち得ていたのか。

少年少女向けの近代以降の「文学」は、「童話」を中心とする「児童文学」と、やや年長を意識した「小説」などの散文作品を中心として考えられていたが、散文の種類としては、写生や自伝的作品、感想といった文種も想定されており、さらに詩や劇も、常に一定の位置を占めるものであった。また、戦前から続く少年向け少女向けの読み物的な長編も、日常的な世界を描く作品のほか、伝奇物・時代物、探偵物などに分けられるような多様さを持ち、読み継がれてはいたが、戦後に新たに書かれた作品では、概して日常を描くものが多い。他方、一部の「童話」作品を除けば、今日の「ファンタジー」に該当するような作品は、ほぼ皆無といってよい状態である。

さらに気に留めておきたいのは、本稿では現在の眼から振り返るため、「近代文学」という語を用いているが、この段階では、まだこの語は、意味を十分に確立させていないように思われる、という点である。

この後、一九五〇年代末に到来する「現代児童文学」の出版により、ここで見てきたような叢書に見られる多様な「文学」の幅は、むしろ狭められ、散文の「小説」中心に移行していったのではないだろうか。そのとき、新しい創作とは異なる、少年少女向けの叢書においては、どのような変化が起き、新たな特徴が出てくるのだろうか。

次には、児童書出版社である偕成社から刊行される近代文学関係の叢書などに目を移して、引き続き検討を続けていくこととしたい。

※本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「戦後児童文学にみる「文学」の体系化と規範化——少年少女向け叢書を中心に」(課題番号16K02398、平成二八年度(三一年度))の研究成果の一部をまとめたものである。

※本稿の骨子は、二〇一六年一〇月三〇日(日)、日本児童文学学会第五回研究大会の席上において発表した。

日本児童文学全集 全12巻 河出書房 1953年～54年 函入り 450円

編集 = 小川未明・坪田譲治・百田宗治・塚原健二郎・浜田広介・酒井朝彦・古谷綱武

| 巻数 | 配本 | 発行日        | 巻名        | 内 容   | 解説    |
|----|----|------------|-----------|---|-------|
| 1  | 3  | 1953. 5. 1 | 童話篇 1     | 巖谷小波集 (作者の略歴、2)、鈴木三重吉集 (作・略、4)、有島武郎集 (作・略、4)、島崎藤村集 (作・略、1 (全))  | 古谷綱武  |
| 2  | 1  | 1953. 3. 1 | 童話篇 2     | 小川未明集 (作者の言葉、作者の略歴、23)、秋田雨雀集 (作者の言葉、作者の略歴、8)  | 塚原健二郎 |
| 3  | 8  | 1953. 9.20 | 童話篇 3     | 武者小路実篤集 (作・言、作・略、4)、志賀直哉集 (作・言、作・略、5)、芥川龍之介集 (作・略、9)、佐藤春夫集 (作・言、作・略、10)   | 坪田譲治  |
| 4  | 2  | 1953. 4. 1 | 童話篇 4     | 宮澤賢治集 (作・略、5)、浜田広介集 (作・言、作・略、10)、坪田譲治集 (作・言、作・略、8)  | 奥田準一  |
| 5  | 11 | 1953.12.20 | 童話篇 5     | 宇野浩二集 (作・言、作・略、5)、豊島與志雄集 (作・言、作・略、5)、江口渙集 (作・言、作・略、5)、山村暮鳥集 (作・略、9)、相馬泰三集 (作・略、5)、千葉県三集 (作・言、作・略、5)   | 浜田広介  |
| 6  | 6  | 1953. 8. 1 | 童話篇 6     | 塚原健二郎集 (作・言、作・略、9)、酒井朝彦集 (作・言、作・略、9)、壺井栄集 (作・言、作・略、6)   | 関 英雄  |
| 7  | 4  | 1953. 6. 1 | 童話篇 7     | 横本楠郎集 (作・言、作・略、6)、川崎大治集 (作・言、作・略、3)、新美南吉集 (作・略、3)、奥田準一集 (作・言、作・略、4)、奈街三郎集 (作・言、作・略、4)   | 酒井朝彦  |
| 8  | 7  | 1953. 8.20 | 童話篇 8     | 平塚武二集 (作・言、作・略、4)、佐藤義美集 (作・言、作・略、8)、関英雄集 (作・言、作・略、4)、猪野省三集 (作・言、作・略、4)、岡本良雄集 (作・言、作・略、4)  | 高山 毅  |
| 9  | 9  | 1953.10.20 | 詩・童話篇     | 北原白秋集 (58)、三木露風集 (22)、西條八十集 (54)、野口雨情集 (40)、島木赤彦集 (27)、百田宗治集 (35)、丸山薫集 (18)、サトウ・ハチロー集 (12)、巽聖歌集 (42)、佐藤義美集 (42)、奥田準一集 (34)<br>作・略あり                                 | 百田宗治  |
| 10 | 10 | 1953.11.20 | 児童劇篇      | 童話劇篇 = 久保田万太郎 (2)、秋田雨雀 (2)、長田秀雄、武者小路実篤、山本有三、楠山正雄、額田六福、岡田八千代、北村寿夫、水谷まさる、小山内薫 (2)、木下順二 / 学校劇篇 = 坪内逍遙、斎田喬、落合聰三郎、宮津博、永井麟太郎、内山嘉吉、阿貴良一、岡田陽、栗原一登、村山亜土、岡一太<br>作・略あり、氏名のみは各1 | 山室 静  |
| 11 | 12 | 1954. 1.30 | 少年少女小説篇 1 | 吉屋信子、木内高音、吉田甲子太郎、後藤梢根 (2)、青木茂、国分一太郎、椋鳩十、久保喬、田端修一郎、松坂忠則、伊藤貴磨 (3)、小山勝清、森田たま、吉田絃二郎、波多野完治<br>作・略あり、氏名のみは1   | 滑川道夫  |
| 12 | 5  | 1953. 6.30 | 少年少女小説篇 2 | 国木田独歩 (2)、吉江喬松 (3)、川端康成 (3)、北島八穂 (2)、土田耕平 (3)、阿部知二、吉田一穂 (3)、林美美子、室生犀星 (2)、藤森成吉、中勘助、前田夕暮 (3)、ワシリー・エロシエンコ (2)、田宮虎彦、徳永直、堀辰雄、中西悟堂、寺田寅彦 (2)、夏目漱石、森鷗外<br>作・略あり、氏名のみは1     | 山室 静  |

## 日本少女少女名作全集 全20巻 河出書房 1954年～55年 函入り 280円

監修=西条八十・吉川英治・吉屋信子・川端康成

| 巻数 | 配本 | 発行日        | 著者名     | まえがき部分                         | 内 容                                      | 少女 | 少年 | その他          | 詩  |
|----|----|------------|---------|--------------------------------|--|----|----|--------------|----|
| 1  | 1  | 1954. 8.25 | 大佛次郎    | 鞍馬天狗について                       | 角兵衛獅子、山岳党奇談<br>→総題は鞍馬天狗                  |    |    | 時代 2         |    |
| 2  | 2  | 1954. 8.31 | 吉屋信子    | 花物語                            | 花物語 (45編)                                | 連作 |    |              |    |
| 3  | 3  | 1954. 9.10 | 下村湖人    | 「少年のための次郎物語」について、「眼ざめ行く子ら」について | 少年のための次郎物語 (1)、少年のための次郎物語 (2)、眼ざめ行く子ら    |    | 3  |              |    |
| 4  | 4  | 1954. 9.25 | 川端康成    | 三つの物語について                      | 乙女の港、美しい旅、万葉姉妹                           |    | 3  |              |    |
| 5  | 5  | 1954.10. 5 | 北條 誠    | 私の少女小説                         | 乙女椿、哀しき花束、また逢う日まで、別れの曲                   |    | 4  |              |    |
| 6  | 6  | 1954.10.15 | 北村寿夫    | 読者の皆さんに                        | 白鳥の騎士 (上)、白鳥の騎士 (下)、母の湖、黄金十字城            | 1  |    | 伝奇 3         |    |
| 7  | 7  | 1954.10.31 | 富田常雄    | 作者のことば                         | 虹を射る少年、この星万里を照らす、愛の新珠                    | 1  | 2  |              |    |
| 8  | 8  | 1954.11.15 | 村上元三    | 少女少女諸君のために                     | 水滸伝、風雲隼隊、神変稲妻童子、戦国まぼろし城                  |    |    | 伝奇 2、時代 2    |    |
| 9  | 9  | 1954.11.20 | サトウハチロー | 序の代り                           | ジロリントン物語 (1)、ハチロー少年詩集、ジロリントン物語 (2)       |    | 2  |              | 少年 |
| 10 | 10 | 1954.11.30 | 吉川英治    | はしがき                           | 少年太閤記、左近右近                               |    |    | 時代 2         |    |
| 11 | 11 | 1954.12.10 | 芹沢光治良   | 私の少女小説                         | 美しき旅路、牧師館の少女、薔薇は生きている、パリ乙女               | 4  |    |              |    |
| 12 | 12 | 1954.12.25 | 野村胡堂    | 三つの物語                          | 地底の都、ロボット城、大宝窟                           |    |    | 冒険 3         |    |
| 13 | 13 | 1955. 1.10 | 横山美智子   | 三つの作品を前にして                     | 山鳴り、白鳥の湖、花の冠                             | 3  |    |              |    |
| 14 | 14 | 1955. 1.31 | 横溝正史    | 子供のための探偵小説                     | 真珠塔、夜光怪人、怪獣男爵、短編 (黒薔薇荘の秘密、謎のルビー、怪盗どくろ指紋) |    |    | 探偵 3 + 3 短   |    |
| 15 | 15 | 1955. 2.25 | 尾崎士郎    | 四つの物語について                      | われは山の子、少年行進曲、父の星、砂漠の若武者                  |    | 2  | 伝奇 2         |    |
| 16 | 16 | 1955. 2.28 | 堤 千代    | 読者のみなさま                        | カナリヤの歌う日、みんなきた道、どこかで星が、かえで鳥の歌            | 4  |    |              |    |
| 17 | 17 | 1955. 3.25 | 大下宇陀児   | よい子の諸君へ                        | 仮面紳士、魔法少年、金獅子島の秘密、花咲く丘、鉄腕拳闘王             |    |    | 探偵 5 (含探検冒険) |    |
| 18 | 18 | 1955. 3.31 | 加藤武雄    | 三篇の小説について                      | 木枯吹けど、吹けよ春風、海に立つ虹                        | 3  |    |              |    |
| 19 | 19 | 1955. 4.15 | 大林 清    | 私の作品について                       | 嘆きの夜曲、虹よふたたび、雲よいずこへ                      | 3  |    |              |    |
| 20 | 20 | 1955. 4.30 | 西条八十    | はしがき                           | 古都の乙女、青衣の怪人、八十・少女純情詩集                    | 1  |    | 探偵 1         | 少女 |



日本少女少女文学全集 全21巻予定→3巻刊行 河出書房 1957年～ 函入り 380円

監修＝小川未明・川端康成・阪本一郎・坪田譲治・吉田甲子太郎  
編集＝荒正人・菅忠道・瀬沼茂樹・高山毅・山室静

| 巻数 | 配本  | 発行日        | 巻名                     |
|----|-----|------------|------------------------|
| 1  |     |            | 森鷗外・幸田露伴・樋口一葉・国木田独歩集   |
| 2  |     |            | 夏目漱石集                  |
| 3  | 3   | 1957. 3. 1 | 島崎藤村集                  |
| 4  |     |            | 鈴木三重吉・寺田寅彦・中勘助集        |
| 5  |     |            | 芥川龍之介・菊池寛・野上弥生子・吉田絃二郎集 |
| 6  |     |            | 志賀直哉・武者小路実篤・有島武郎・長与善郎集 |
| 7  |     |            | 豊島与志雄・宇野浩二・佐藤春夫集       |
| 8  | (4) |            | 山本有三集                  |
| 9  | 1   | 1957. 1. 1 | 小川未明・秋田雨雀・坪田譲治・浜田広介集   |
| 10 |     |            | 川端康成・伊藤整・井伏鱒二・阿部知二集    |
| 11 | 2   | 1957. 2. 1 | 下村湖人集                  |
| 12 |     |            | 宮沢賢治・与田準一集             |
| 13 |     |            | 壺井栄・竹内てるよ・畔柳二美集        |
| 14 |     |            | 林芙美子・北島八穂・石井桃子集        |
| 15 |     |            | 吉田甲子太郎・青木茂・檀一雄・小山勝清集   |
| 16 |     |            | 国分一太郎・那須辰造・鶴田知也集       |
| 17 |     |            | 詩と小品集                  |
| 18 |     |            | 児童劇・学校劇集               |
| 19 |     |            | 生い立ちの記                 |
| 20 |     |            | 名作短篇集                  |
| 21 |     |            | 少年少女作品集                |

第1回配本 第9巻 小川未明・秋田雨雀・坪田譲治・浜田広介集

小川未明…河の上の太陽、空中の芸当、薔薇と巫女、赤いろうそくと人魚、野ばら、青空の下の原っぱ  
秋田雨雀…埋もれた春、野の郡長さん、白鳥の国、太陽と花園  
坪田譲治…お化けの世界、風の中の子供、お馬、よるのゆめ ひるのゆめ  
浜田広介…ひろい世界  
(解説) 高山毅

第2回配本 第11巻 下村湖人集

次郎物語 第一部、第二部、その後のあらすじ(第三部—第五部)  
(解説) 荒正人

第3回配本 第3巻 島崎藤村集

千曲川のスケッチ  
童話(28編)  
詩…おえふ、白壁、秋のうた、初恋、雲のゆくへ、千曲川旅情の歌、思より思をたどり、椰子の実  
小説…嵐、伸び支度、芽生え、樹木の言葉、生い立ちの記  
フランスの旅から(4編)  
感想(5編)  
(解説) 山室静

第4回配本 第8巻 山本有三集 →未刊 月報予告より

[小説] 路傍の石(全)、ふしやくしんみよう、子やく、兄弟  
[戯曲] ウミヒコ ヤマヒコ  
[シナリオ] 雪  
[感想] おみおつけ、小人国  
その他